OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書き換えられる未来 : アイザック・アシモフの歴史改変小説と未来史
Author(s)	小畑, 拓也
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1998, 32, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書き換えられる未来

——アイザック・アシモフの歴史改変小説と未来史——

小畑拓也

1　治療法としての時間旅行

特定の歴史的事象を症状、すなわち、時の流れに巣くう病理の現れだとする考え方がある。つまり、その病因を取り除けば、歴史が「健全な」発展を遂げる筈だというのだ。現在の状況は過去にその原因があり、過去に遡及して物事のあり方を望ましい方向に誘導してやれば、悪しき現状も正されるに違いない、というわけである。これは、歴史という巨視的な時間の流れを個別の人生という微視的なものになぞらえることで生まれた思考であるといえる。もちろん、実際に時間を遡り得ぬ以上、現実に於いてはいかに「異常」に思える歴史的事象といえども、その「病因」を断ち、変革することが叶う筈もない。しかし、そうした一見不可能な事柄も、思弁小説（speculative fiction）としてのＳＦの領域に属する虚構世界に於いてはまた違った様相を呈することになるのである。[1)]

Ｈ・Ｇ・ウェルズによるタイムマシン、過去と未来への双方向性を備えた時間旅行装置の「発明」は、上述した歴史改変の可能性という新たな地平を虚構世界に開いた。この歴史の可変性は、大きく分けて二つの勢力のせめぎあいを引き起こすことになる。一つには歴史を積極的に改変していこうとするグループ。もう一つは歴史を「あるがままの状態」に保とうとする者達である。この時間旅行を背景にした歴史の恒常性とその擾乱をモ

チーフとして、複数のサブジャンルが成立するほど多くの物語が作られていった。自らの利益の為に歴史改変を行おうとする「時間犯罪者」を取り締まる「タイムパトロールもの」は言うに及ばず、並行する可能世界の多様性を垣間みせる「多元宇宙もの」の作品や、歴史の if を描き出す「歴史改変小説（alternative history）」等がそれである。[2)]

遥か未来の銀河帝国の衰退と再興への道を描いた「ファウンデーション」シリーズで知られるアメリカのＳＦ作家アイザック・アシモフ（Isaac Asimov）は、ほぼ同時期に同じ『アスタウンディング』誌でデビューを飾り、やはり「未来史」ものでヒットを飛ばしていたハインライン（Robert A. Heinlein）に較べて、はっきりした形で時間旅行をモチーフにした作品は多いとは言えない。しかし、彼の数少ない時間テーマ作品である『永遠の終り』（*The End of Eternity*）（1955）は、このサブジャンルに属する作品として非常に高い完成度を誇っている。時間の健全な（或いは、自然な）流れというものへの問いを物語の中心に据えたこの長編はまた、結末に於いて、作家が晩年に至るまで書き継いだ「未来史」、「ファウンデーション」シリーズを遥かに望む序章の体をもなしているのである。

時間旅行と未来史、この二つのテーマはＳＦというジャンル内でもそれぞれ独立したサブジャンルであると見なされることが少なくない。しかし、「ファウンデーション」シリーズと『永遠の終り』を併置し、上述した歴史改変というモチーフを介在させると、双方に示される歴史という時間に対する認識の共通性が見えてくることになる。[3)] 本稿では、アシモフの描く未来史と歴史改変小説がそれぞれ、どういった形で歴史を捉え、また、そのあり方を虚構の中に構築していったかを検証する。更に、そうした虚構が様々な形で現実を侵食する可能性についても考えてみたい。

2 預言としての未来史

ハインラインの初期「未来史」が未来社会のそれぞれの時代の断面を活写したスケッチ風のものだとするならば、アシモフの「ファウンデーション」は銀河帝国の衰退と再興のダイナミズムを描いた壮大なパノラマに例えられよう。しかしながら、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』をモデルにしたというこの宇宙叙事詩は、実際には雑誌連載という発表形式の制約もあって、ハインラインの「未来史」と同じ断片的な短篇連作の手法を出発点としているのである。とはいえ、それらの連作を統合する強力な求心力がこの未来史物語には初めから存在した。[4] それが、シリーズ名にもなっている「ファウンデーション」(Foundation) である。

ここで「ファウンデーション」シリーズの最初の三部作『ファウンデーション』(*Foundation*) (1951)『ファウンデーションと帝国』(*Foundation and Empire*) (1952)『第二ファウンデーション』(*Second Foundation*) (1953) を統べる中心的なプロットを概括しておこう。「ファウンデーション」とは当初、「銀河百科事典」(Encyclopedia Galactica) 編纂を目的とする財団 (Encyclopedia Foundation Number One) であると説明される。財団創設者のハリ・セルダンは特定の時点での社会の状況を数学的に解析し、集団としての人間の反応を加味した上で、未来予測を打ち立てるという「心理歴史学」(psychohistory) なる学問の創始者でもある。彼は銀河系ほぼ全域を版図に収めた強大な帝国の滅亡を予測し、その後に続くであろう三万年もの「暗黒時代」(the dark ages) をわずか一千年 (one millennium) にまで短縮し、新たな秩序を回復する為には帝国に蓄えられた知識の保存が不可欠であると主張して、銀河の最果ての惑星ターミナスに「ファウンデーション」を設立する。しかし、百科事典計画を隠れ蓑としたセルダンの真の「プラン」(the Plan) では、「ファウ

ンデーション」は単なる百科事典編纂の為の組織ではなく、銀河の対極にあるもう一つの「ファウンデーション」とともに、来るべき「第二銀河帝国」の礎としての役割を担うものなのである。(". . . Terminus [Foundation] and its companion Foundation at the other end of the Galaxy are the seeds of the Renascence and the future founders of the Second Galactic Empire. . . .") (*Foundation* 95)。

こうなると一目瞭然であろう。ハリ・セルダンは預言者なのである。それも、ただ未来予測をなす「予言者」ではなく、ユダヤ教、キリスト教の聖書に登場する、人々の精神的な指導者としての「預言者」なのだ。セルダンは神の声を聞いて人々を導くわけではない。しかし、「帝国」が滅亡するという「歴史の必然」は、逆らいがたい運命としての神託的な要素をはらむ。「心理歴史学」を通じてそれを幻視し、人々に警鐘を鳴らすその姿は紛れもなく預言者である。現世に「第二銀河帝国」という理想郷を築くことを最終目的としているところから見て、多分にユダヤ教的な性格が強いことは否定できない。実際、作中に於いてセルダンは「ファウンデーション」が危機に瀕し、それを乗り越える度に、予め設置された「時間霊廟」(the Time Vault) に録画映像の形で姿を現しては、過ぎ去った危機に解説を加え、「プラン」の順調な進行を告げるのである。このような形で進行する「ファウンデーション」の歴史は、セルダンの「プラン」によって裏書きされた、予型論、預言の実現としての歴史なのだといえるだろう。そこでは、すべてが計画されたとおりに進行する。というより、進行しなければならない。初期「ファウンデーション」が銀河の辺境地域に神権政治を持って勢力を拡大しつつあった頃に、その支配領域で囁かれた迷信が、その本質を示すものとなっている。曰く、". . . [T]he *Prophet* Hari Seldon . . . appointed the Foundation to carry on his *commandments* that there might some day be a return of the Galactic Paradise. . . ."

(*Foundation* 130, emphasis added)。また、最初の危機に「時間霊廟」に姿を現したセルダンは演説の締めくくりに、"[W]hat devious course your future history may take . . . the path has been marked out, and . . . at its end is a new and greater Empire!" (*Foundation* 96) と語る。かくして、ハリ・セルダンの姿は艱難辛苦を乗り越え、「約束の地」へと人類を導く預言者として確かな形で浮かび上がってくる。そうなると、多様な未来の可能性は、(「暗黒時代」を徒に引き延ばす悪しきものとして) 完全に否定されてしまう。「霊廟」にセルダンが姿を現し続ける限り、預言として与えられた道しるべを辿って行くことが唯一の答えなのである。「ファウンデーション」が二度目の危機に瀕したとき、はっきりしない未来の為に現在を危機にさらしてもよいものかと問われて、「ファウンデーション」の市長サルヴァー・ハーディンが答える台詞はそのことをあからさまなまでに示している。

> ". . . [T]he future isn't nebulous. . . . Each successive crisis in our history is mapped and each depends in a measure on the successful conclusion of the ones previous. This is only the second crisis and Space knows what effect even a trifling deviation [from the Plan] would have in the end."
>
> (*Foundation* 119)

預言者セルダンの示した「プラン」の墨守、それが「ファウンデーション」の採るべき道だというわけである。

だが、人間の反応を集団の単位でしか捉えきれないセルダンの「心理歴史学」にとって不測の事態ともいうべき、人心を操る特殊能力を備えた一個人の征服者ミュールの登場によって、「ファウンデーション」の歴史の「プラン」からの逸脱が生じる。その時から、唯一の進むべき道筋と考えられていた未来像が次第に曖昧なものへと変容していくことになる。ミュール登場以降の未来の事象は、かつてサルヴァー・ハーディンが言ったよ

うな「図上に示された」(charted) ものではなくなってしまった。そこで、ミュールを倒し、逸脱を修正する為に、存在が示唆されながら秘せられていた「第二ファウンデーション」がいよいよその姿を現す。「心理歴史学」はその未来予測の適応対象を「心理歴史学」について無知な集団に限定していた。予測の手法を理解出来ればそれを応用して「プラン」の先読みやそこからの逸脱を引き起こす可能性がある。「第二帝国」に至る道筋の正確な予測を可能たらしめる必要上、テクノロジー主導型の世界「ファウンデーション」から注意深く取り除かれていた「心理歴史学」の知識を集積した世界を住処とする「プラン」の守護者。それが「第二ファウンデーション」である。しかし、ひとたびミュールによって改変された歴史の道筋は、その守護者達の手によっても、決して完全な形でもとに戻ることはない。なぜならば、いかなる軌道修正も、同じ時間線上の経路を辿るわけには行かない以上、「プラン」本来の姿の復元ではなく、書き直しでしかあり得ないからだ。[5)]

三部作の最後の一篇『第二ファウンデーション』に於いて、「第二ファウンデーション」はミュールを打ち破り、また、ダブルとしてのもう一つの「ファウンデーション」の存在を脅威だと感じ始めた「第一ファウンデーション」の探索と攻撃からも身をかわして、「プラン」の復旧につとめ、それを成し遂げたかに見える。だが、その歴史の軌道修正の行為自体が、本来「プラン」のはらむ恣意性を露呈してしまう。「プラン」が決して神聖不可侵のものではないのだということを。もちろん、初めから神ならぬ身の人の手になる計画であれば、その限界は作中に繰り返し書き込まれていたのではあるが。とはいえ、「第二銀河帝国」への道しるべとしての「プラン」の実像が初めて「ファウンデーション」の市民の前でセルダン自身から明かされた時、既に彼が世を去っていたという事実は、「プラン」の預言的性格を強化していた。つまり、「ファウンデーション」の歴史と

は、既に書き終えられ、編纂された「未来史」の追体験的遂行に他ならなかったのだ。そうした「プラン」の性格を補強するかのように、三部作の二作目に当たる『ファウンデーションと帝国』の第一部「将軍」("The General") で帝国の将軍ベル・リオーズが、台頭する「ファウンデーション」を倒して昔日の栄光を取り戻そうとした企ては、後一歩というところでセルダンの「死者の手」によって阻まれてしまう。それを評して、登場人物の一人ドゥーセム・バーは、"There was a dead hand pushing all of us . . . the dead hand of Hari Seldon. He knew that a man like Riose would have to fail . . ." (*Foundation and Empire* 96)と語り、事の成りゆきが「プラン」によって運命づけられていたことを強調している。してみれば、続く第二部「ザ・ミュール」("The Mule") に描かれた、ミュールの「ファウンデーション」征服による「時間霊廟」の破壊と「プラン」の逸脱、その後の「第二ファウンデーション」による軌道修正の作業は、未来を「死者の手」から生者のもとへ奪還する行為だったのだといえるのかもしれない。三部作の中間、折り返しにかかったところで、「プラン」の存在という大枠自体は変化しないものの、その埒内で進むべき未来の道筋は、既に預言の中に定められた運命としてのものから、選び採られ新たに書き込まれる、いわば開かれたものへと移行しているのだといえる。

3　逸脱、修正、改変：書き換えられる未来

「時間霊廟」が失われたことで、「プラン」の管理はひとえに「第二ファウンデーション」へと委ねられ、未来が「死者の手」から生者の手に奪還された。「プラン」の存在は動かぬものの、その結実へ向けてのシナリオの細部はことあるごとに書き直しを迫られることになる。一方、「第二ファウンデーション」は「プラン」こそがセルダンが作り上げた未来のあるべき姿の見取り図であり、歴史の「健全な」発展のあり方を示したもの

で、銀河帝国崩壊後の三万年の「暗黒時代」を回避する為には不可欠なものだと信じている。そして、この「プラン」実現の為であれば、敢えて歴史に干渉することも辞さない。

このような思考は、『永遠の終り』に描かれる人類史の「健全な」発展を管理する機関「永遠」(Eternity) が行う「現実矯正」(Reality Change) の論理と酷似している。「永遠」は「プラン」のような具体的な目的意識からではなく、むしろ戦乱や無秩序を否とする漠然とした倫理観に基づいて、現実に矯正を加え、理想的な世界の実現に、そしてその管理者としての自己の保存に邁進する存在である。自己保存という意味では自らの存在意義でもある「プラン」の保全に力を尽くす「第二ファウンデーション」のあり方と通底するものが読みとれる。また、その命題が『永遠の終り』に於いても物語の中核をなすものとなっている。人類史を管理、矯正する「永遠」は、それ自体が「現実矯正」の影響を受けないように通常の時間の流れの外に設置されている。そして、その設立は未来から過去への干渉によって、つまり、「永遠」そのものによって、錯時的に成し遂げられたものなのである。

『永遠の終り』の結末、「永遠」の一員である主人公ハーランは「永遠」設立以前の時代に赴き、そこでその機関が人類史の発展に悪影響を及ぼしていることを知らされる。「永遠」による「現実矯正」が結果として人類の衰退を、更には滅亡をもたらすというのである。ハーランは「永遠」の誕生を妨げる決断をなし、その結果「永遠」は失われ、かわりに人類史の新たな未来、「無限」(Infinity) の世界が開かれる。人類史の病理を矯正、治療していた筈の「永遠」がそれ自体人類史上に巣くう病理に他ならなかったという認識。そして、「永遠」が存在する未来は修正され、消去される。『永遠の終り』の中で歴史は「現実矯正」で何度となく書き換えられていくが、それは人類を地球上に押し止め、その発展にとって閉塞的な状

況をもたらすだけであった。しかし、唯一「永遠」以外の手によって行われた最後の「現実矯正」、歴史の書き換えによって、人類が「銀河帝国」を築き上げる可能性（a Galactic Empire）が芽吹くことになる（*The End of Eternity* 188）。かくして、『永遠の終り』は、「ファウンデーション」シリーズへの序章として機能し始める。[6)]

ここで一旦、「ファウンデーション」三部作と『永遠の終り』の物語内事象の時間的位相関係について、現実の発表時期の前後関係をも加味して考えておきたい。「ファウンデーション」シリーズは1942年『ファウンデーション』第二部の「百科事典編纂者」（"The Encyclopedists"）が『アスタウンディング』誌上で「ファウンデーション」（"Foundation"）として発表されてから、1950年に『第二ファウンデーション』第二部「ファウンデーションによる探索」（"Search by the Foundation"）が同誌に「――しかもわかっていなくもある」（". . . And Now You Don't"）として掲載され、更に1951年、『ファウンデーション』の単行本化を機に第一部「心理歴史学者」（"The Psychohistorians"）が書き下ろしの形でつけ加えられ、三部作としての完結を見ている。一方、『永遠の終り』は1955年の出版である。つまり、未来史を年表化した中で位置づけるとすれば、後から出版された作品『永遠の終り』が、先行する「ファウンデーション」三部作に描かれた未来世界の源流に位置することになる。すなわち、「ファウンデーション」三部作の前史に当たる部分が、『永遠の終り』という物語の形で時間的に後方から書き加えられ、総体としての未来史を補完しているのである。

伝記的事実と虚構内現実を交錯させて考えてみるならば、「現実」の未来（作品発表の時点）から「虚構」の過去（作品内の時代）への錯時的干渉がここで生じているのである。その同じ図式は、歴史改変の物語である『永遠の終り』そのものにも現実矯正機関「永遠」とその誕生をめぐる因

果関係として埋め込まれている。また忘れてはならないのは、「ファウンデーション」三部作に於いても「ファウンデーション」設立以前の物語である「心理歴史学者」が後から書き加えられているという事実である。後世から前史的部分を書き加えていくことが、歴史のあり方、読み方を従来のものから逸脱、変容させてしまうのだ。最初に発表された『ファウンデーション』第二部の「百科事典編纂者」で「時間霊廟」に出現したセルダンは、「ファウンデーション」が銀河の周縁部に勃興した四つの王国に包囲、侵略されようとする最初の危機を、あたかも歴史的必然であるかのように述べている。

> ". . . From now on, and into the centuries, the path you must take is *inevitable*. You will be faced with a series of crises, as you are now faced with the first, and in each case your freedom of action will become similarly circumscribed so that you will be forced along one, and only one, path."
>
> (*Foundation* 94, emphasis added)

ところが、後から加えられた第一部「心理歴史学者」の終わりで、生前のセルダンは、自らの後継者達が計画の仕上げとして四つの王国の一つアナクレオンの反乱を煽動するであろうことをほのめかしている (". . . [T]hese successors will be able to apply the final touch in the scheme and instigate the revolt on Anacreon at the right time and in the right manner. Thereafter, events may roll unheeded.") (*Foundation* 46)。この最初のボタンが押されない限り、「プラン」はスタートしない。歴史の必然と思えたことがその実、綿密に計画された事柄であったという事実の暴露。超自然的な預言とさえ映ったものが実は人為の所産であることが明らかになり、先に述べた「ファウンデーション」シリーズに於ける予型論的未来観の破綻をこれまた錯時的に裏付けることになる。「第二ファウンデーション」が手を下した修正によって、定められた未来としての「プラ

ン」の性格は薄れていく。動かし難いほどに強固な預言だと思われたものが、実の所、「第二ファウンデーション」の庇護なしにはその存続すら危ぶまれるような、脆弱なものであったことが明らかにされてしまうのである。書き換えることが出来ない歴史として提示された筈の未来が、歴史物語の形式を保ちながらも、書き換えを受け入れざるを得なくなる過程がここにある。

次に、各部の冒頭のエピグラフとして掲げられた「銀河百科事典」からの抜粋に注目しておきたい。三部作の各編の最初の抜粋には、ご丁寧に以下のような注が付されている。

> All quotations from the Encyclopedia Galactica here reproduced are taken from the 116th Edition published in 1020 F.E. by the Encyclopedia Galactica Publishing Co., Terminus, with permission of the publishers.
>
> (*Foundation* 3, *Foundation and Empire* 7, *Second Foundation* 7)

「1020 F.E.」とは、「ファウンデーション紀元1020年」を指す。この紀元は「ファウンデーション」設立を元年としているから、この版の出版は「プラン」が示すところの「第二銀河帝国」成立以降と言うことになる。それはとりもなおさず、これらの抜粋が未来のあらゆる事象を過去の記述として歴史化する、回想の（retrospective）視点を確保する為のものであることを示している。それぞれの抜粋が各部の登場人物や事象についての記述であり、一種梗概としての役割を果たし、読者はエピグラフから、これから読み進めていく内容を部分的ながら予見することになるのである。だが、「百科事典」の記述と物語として描かれる事象との間には確実にズレが存在する。それは抜粋から得た予見的な印象を物語が裏切るという形で生み出されていく。ここには「プラン」の預言としての側面とその遂行に於ける実際上の変更点のギャップが生む未来史の事象に対する認識の問題が、既に内包されていると言えるのかも知れない。してみると、セ

ルダンの「プラン」を初めからその破綻と書き換え（／書き直し）を予定されていたものとして読むことも不可能ではない。もちろん、それが『永遠の終り』の様な明確なまでの「歴史改変」志向との並置から生じる「深読み」である可能性は否定出来ないが、この並列関係は「未来史」全般がはらむ虚構の歴史化への強い傾向を浮き彫りにする為の契機となり得よう。

4　虚構の侵食：書き換えられる過去

未来史の持つ虚構の歴史化という傾向と対になるものとして、歴史の虚構化としての歴史改変小説が考えられる。未来史を代表する「ファウンデーション」シリーズに対置する為に、本稿ではアシモフの歴史改変小説の代表として『永遠の終り』を取り上げてきたわけだが、初めに分類した際の歴史のif（すなわち、歴史上の分岐点から別のルートを辿った世界）を描くものという意味では、少し外れているように見える。しかし、作中で示される未来の歴史改変はその実、過去の恣意的な書き換え（／読み換え）である修正主義的な傾向を、そのサブジャンルに属する作品とはっきりと共有しているのである。

『永遠の終り』の中で恋人のノイエスが「永遠」を消去するように主人公ハーランを説得するときの台詞にそれは端的に表れる。彼女は、「永遠」が失われ、一つに収斂した「現実」での歴史事象として1945年に起きる最初の核爆発のことを予見してみせる（". . . In the new Reality, the final Reality, the first nuclear explosion will take place not in the 30th Century but in the 19.45th."）(*The End of Eternity* 188)。1945年の核爆発。それは、この『永遠の終り』の虚構世界が最終的に収斂するのが、我々読者の側の現実世界であることを示唆している。更に、それが「銀河帝国」への可能性へと接ぎ木されているのである。「永遠」が支配する閉

塞的な未来社会の状況を脱するブレイクスルーとして、持ち出されたのがよりにもよって核兵器であった。「あるイタリア人」に核兵器の実験に示唆を与える手紙を出すことで、最後の「現実矯正」が遂行され、その結果「永遠」は消滅する。(*The End of Eternity* 187)。[7] このように『永遠の終り』は、消極的な歴史的事実の承認というよりも、虚構に於いてむしろその事実を積極的に強化し、「過去」を正当化しようとする危険な修正主義的傾向をのぞかせているのである。[8]

初めにも述べたが、現実には時を遡り、過去を書き換えることは出来ない。しかし、時として歴史改変の虚構は自己正当化の願望を原動力として、現実を侵食しようとする。民族的起源へのノスタルジアの発露としてのファッショや、自国史正当化の為の歴史修正主義の暴力性は、その事例である。未来史のように虚構を歴史化し、また「歴史改変小説」のように歴史を虚構化する、多分に遊戯的な部分をはらんだ思考実験装置である筈のSFも、読み方によっては狭量な世界観を伝達する媒体に成り下がる諸刃の剣としての側面を併せ持つのだという事実を見失うべきではない。

テクスト

Isaac Asimov, *The End of Eternity* (London: Grafton Books, 1959)
Isaac Asimov, *Foundation* (New York: Bantam Books, 1991)
Isaac Asimov, *Foundation and Empire* (New York: Bantam Books, 1991)
Isaac Asimov, *Second Foundation* (New York: Bantam Books, 1991)
引用箇所は括弧内に書名、頁数の順に示す。

注

1) Jack Williamson の *The Legion of Time* (1938)に「悪しき未来」の「望ましい」方向への修正という考えは既に示されている。Edward James, *Science Fiction in the 20th Century* (Oxford: Oxford U. P., 1994). 113-114.

2) 時間旅行と多元（並行）宇宙の考え方及び「歴史改変小説」の関係につい

てはJohn Clute and Peter Nicholls, *The Encyclopedia of Science Fiction* (New York : St. Martin's Griffin, 1995), ALTERNATE WORLDS, HISTORY IN SF の項を参照のこと。

3) Clute and Nicholls, TIME PARADOXES の項を参照のこと。

4) ハインラインの「未来史」も後期の長編によって、ラザルス・ロングを中心とした個人史の形に収斂する。同様の作品世界統合の傾向は、アシモフのロボットシリーズと「ファウンデーション」シリーズをつなぐ、晩年の長編群（*Foundation's Edge* (1982), *Foundation and Earth* (1986), *Prelude to Foundation* (1988), *Forward the Foundation* (1993) 等）にも見られる。

5) ミュールによるプランの逸脱は、担当編集者キャンベルによって、三部作の決定論的な性格をうち崩す目的で導入されたという。James, 67.

6) James Gunn, *Isaac Asimov: The Foundations of Science Fiction Revised Edition* (Lanham: Scarecrow Press, 1996), 151.

7) このイタリア人は Enrico Fermi を指すと考えられる。Gunn, 151.

8) アメリカＳＦの核兵器に対する執着については H. Bruce Franklin, *War Stars: The Superweapon and the American Imagination* (New York: Oxford U. P., 1988)に詳しい。注８の Enrico Fermi も、Heinlein の "Solution Unsatisfactory" (1941) がマンハッタン計画に及ぼした影響について述べた部分に登場する（Franklin 142)。前掲書に『永遠の終り』への直接の言及はないが、SFに於ける核兵器以前の超兵器言説の準備と、兵器使用後のその正当化が対をなして現実を侵食する可能性が考えられる。

（大学院後期課程学生）